足関節遊離体による後方インピンジメント症候群と考えられた１症例

○豊田 和也，衣笠 和孝，濱田 雅之

星ヶ丘厚生年金病院　整形外科

【症　例】

16 歳，男性

【主　訴】

右足関節後外側部痛

【既往歴】

小学生時に複数回の足関節捻挫

【スポーツ歴】

サッカー７年間

【現病歴】

2012 年４月頃より，特に誘因無く足関節底屈位でのキック動作にて出現する右足関節後外側部痛を自覚した．経過観察にても症状が改善しなかったため，近医より当科紹介受診となった．

【現　症】

視診上発赤・腫脹を認めず，可動域制限も認めなかった．徒手検査にて内反および前方不安定性は認めなかった．底屈・外旋位強制にて右足関節後外側部に疼痛が誘発された．

【画像所見】

単純レントゲンにて外果遠位に骨片を認めた．CT にて外果遠位前方に３骨片，外果遠位後方に１骨片が確認された．MRI では外果遠位後方の骨片を後距腓靭帯（PTFL）内に認め，T2* にて骨片周囲に高信号変化を認めた．疼痛誘発肢位である右足関節底屈・外旋位にて CT を撮影したところ外果遠位後方骨片が踵腓間においてインピンジしている事が確認された．

【診断・治療経過】

同骨片周囲にエコーガイド下にキシロカインブロックを施行したところ著効した．以上より術前には，陳旧性 PTFL 剥離骨片による後方インピンジメント症候群（PAIS）と診断した．鏡視所見として PTFL は表層に fraying を認め，フックにてプロービングしたところ，PTFL 内より遊離体が核出された．組織学的には石灰化を伴う骨軟骨組織であった．術翌日より立位歩行開始，術後５週にて最大底屈位での疼痛は消失・ボールキック動作可となり，６週でサッカー復帰となった．

【考　察】

PTFL 内に迷入した遊離体による稀な PAIS の１例を経験した．PAIS の診断においては時に難渋することがある．本例においても，底屈位での CT やエコーガイド下のブロックにより疼痛部位については特定しえたが，確定診断には術中所見を必要とした．